



Vol.16

ゆうことみゆきのふくふくトーク ソノコ de ソノコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた
本田優子(札幌大学副学長)と
村木美幸(アイヌ民族博物館専務理事)が、
その魅力をソノコ(=お便り)形式で
語り合います。

イラスト/安田千夏

リムセ(踊り)

リムセやホリップ、ウポポ、ヘチリなどの名称で呼ばれるアイヌ舞踊は、地域毎にいろいろな踊りが伝えられているよね。

私が初めて踊ったのはイヨマンテリムセ。靈送りやお祝いなどの儀礼の際に踊られたもので、私の住む白老に伝わる代表的な輪踊り。「イヨマンテリムセを踊れたら、つくば万博に連れて行ってやるぞ!」という甘い言葉がきっかけで、博覧会の『日本の祭り』に招待された白老民族芸能保存会メンバーの一人として参加。三日間の猛特訓を受けて臨んだ初舞台は動きを真似るので精一杯でしたが、今では私も舞踊歴二十八年になるんだよね。
力強く足を踏み鳴らし、刀を振り、悪神を

威嚇し払う、厳粛にして勇壮な踏舞や剣舞から、二人の女性が男性を取合う滑稽で娯楽性の高い踊りまで、アイヌ舞踊はバラエティに富んでるよね。動物の仕草や植物の動き、狩りや作業の様子をモチーフにした踊りも多く、鶴舞では、一枚多く羽織った着物をツルの羽に見立て優雅な羽ばたきを表したり、バッタの踊りでは、両手を前に突出し、膝や背で擦り合わせる動きは躍動感があつてリアルだし。他にもフクロウやキツネ、ネズミ、クジラ、トドマツなど、地域によって踊りの内容も特徴があつて面白いよね。



そうそう、ストレッチは絶対大事! 二年前、本学ウレシバクラブ主催のウレシバフェスタでのこと。大きなホールの舞台上で学生たちと一緒にフィナーレを飾る踊りを踊っていたの。

「ああ、今年も大成功!」って思った瞬間、バーンって音とともに踵で何かを蹴つたような衝撃——。



白老地方
サロルン
チカマリムセ

ツルの踊り

変だなと思いつつ右足を床に付けた途端、フニャッと倒れ込んだの。なんと華々しいフィナーレ! 舞台の上でアキレス腱切っちゃった(笑)。
この時踊っていたのはチャッピーヤク。アマツバメが空中をヒュンヒュン飛び交う姿を模した踊りと言われています。それだけに、軽快で素早い動きが要求されるの。この踊りが大好きな私は、誰よりも軽やかで楽しそうに踊ると言われたものだったのに: 情けなや。

私が二風谷に移り住んだ九八三年当時、ポピュラーな踊りとして地元で伝承されていたのは、このチャッピーヤクとハララク(ツルの踊り)の他、数種類だけだったの。アイヌ文化が否定され、二風谷に限らず多くの村々で、文化伝承が困難な時期があつたのです。それで、一九五〇年代の記録フィルムに基づき、子どもたちやフチ(おばあさん)たちと踊りの復元活動を行い、随分レベルアップができました。

けれども、生活様式が大きく変化した現代の若者たちが、アイヌの伝統的な動きを「美」のレベルで体得するためには、相当な努力が必要。ウレシバクラブの学生たちが真剣に取り組んでる姿、お見せしたいな。

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学副学長。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族博物館専務理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■安田千夏(やすだちか):神戸市生まれ。元アイヌ民族博物館学芸員。現在は同館でアイヌ若手育成事業の自然講座講師を務める。